

Title	人格化される熊(1)
Author(s)	永井, 理恵子
Citation	聖学院大学論叢, 20(1): 75-96
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=28
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

人格化される熊(1)

— キャラクターとしての「くま」の魅力の謎 —

永 井 理恵子

The Personification of the Bear (1):
A Study of the Appeal of Stuffed Bears

Rieko NAGAI

There are so many different types of characters with such varying designs in Japan today. Most of these characters are taken from animals but are often inspired by human beings and plants. More than that, there are even imaginary characters. Not only do we see them around children as toys but also as decoration in homes.

Why are these characters so attractive to people? Characters allow people to have hopes and dreams for their lives, emotional balance, and a deep feeling of happiness. In this paper, the writer specifically picked the stuffed bear to analyze why it (a little bear) is so loved by people. At the same time, the writer looks at fairy tales and picture books in which bears are often present. The writer also studies what those fairy tale writers think of bears and why they write about them.

Key words: Bear, Stuffed Toy, Transitional Object, Teddy Bear

序

1. 考察の目的と課題

現代の日本社会には、様々な「キャラクター」と呼ばれるモノや絵柄などが溢れている。キャラクターの多くは動物を模ったものが多いが、キャラクターの原型は必ずしも動物に限定されるものではなく、人間もあれば植物もあり、更には全く実在しない架空のものもある。キャラクターは子どもの身の回りに溢れ、更には成人をも魅了し、家庭の中の至るところを埋め尽くす勢いで増殖する。キャラクターの中には、数十年に及ぶ歴史のあるものから、ごく最近になって創造されたものまで、

人格化される熊(1)

また海外で生まれて日本へ入ってきたものから、日本で独自に産まれたものまで、様々なタイプのもものが混在し、その総数は一体どのくらいあるものか、数えきことは全く不可能である。キャラクターの創作過程も個々によって様々であり、物語の中で当初からストーリーを伴って誕生したのもあれば、最初は絵柄や形態が先行して創作され、後に誰かによってストーリーが付与されたものもある。つまり一口でキャラクターと言っても、その創作過程は多種多様なのである。

そのような多様性をもつキャラクターであるが、果して、キャラクターの魅力は何なのか。それは様々な要素が複雑に絡んで醸し出されているように思われる。ただの文具や食器や衣類も、そのキャラクターを身に纏うことにより他のものとは全く異なる価値をもつものに変貌するし、暗く寂しい部屋も、キャラクターの人形やぬいぐるみが置かれるだけで一変し、そのキャラクターを愛する者にとっては明るく暖かく居心地の良い部屋となる。キャラクターを愛する全ての人間にとって、その存在は魔法の妙薬のごとく、日々の生活を夢に満ちたものへと変化させ、情緒の安定や幸福感をもたらすものなのである。

本考察では、上記のような神秘に満ちた魅力を充溢するキャラクターの、魅力の源に関する考究をおこなうことを目指すものであるが、ひとことでキャラクターと言っても上述のように、その数も種類も莫大である。よって今回は、キャラクターに用いられる動植物の中で多用されるものの一つである「くま」に注目し、そのキャラクター誕生の起源と、魅力を分析すると共に、特に「くま」のぬいぐるみ、「テディベア」の持つ魅力について注目して分析する。

論考を開始するに当たり、本ノートにおける「キャラクター」の定義についての方針を述べておく。「キャラクター」あるいは「キャラ」とは我々が日常よく使う語であるが、その辞書的定義は我々が普段使用する際の意味を示すものではない。すなわち辞書によれば「キャラクター」とは「性格づけされた存在。アニメやマンガの主人公・登場人物。」(イミダス)「性格・人格。小説・劇・映画などの登場人物。」(デジタル大辞泉)などのように定義されており、我々が良く用いる「キャラクター」という言葉の意味を的確に表しているとは考えにくい。そこで、この論考を開始するに当たって筆者は、「キャラクター」の語彙を次のように考えたい。すなわち本稿における「キャラクター」とは、「現実には人間として存在しない動植物あるいは想像上の何ものかを人格化し、それに人格を持たせ、愛着を持って可愛がる対象となりうる二次元的ないしは三次元的な存在あるいは形態」を意味するものと定義したい。

2. 課題に接近する視点

「くま」は、あらゆる動植物の中でも非常に多くキャラクター化されるものとして誰もが認める存在である。ざっと思い浮かべるだけでも「プーさん」や「バディントン」、更に児童文学や児童文化に造詣のある向きならば「ウーフ」「こぐまちゃん」「やまのこぐ」「どんくまさん」など。さらに近年になって創作されたキャラクターとしても、イギリスの百貨店ハロッズ・グッズのキャラク

ターであるテディベア（固有名詞は無い）、「ミーシャ」（モスクワ・オリンピックの公式マスコット）、「リラックマ」, 「まくまくん」（NHKみんなのうた「ぼくはくま」の主演）, 「コモモ」（ポストベットのピンクの「くま」キャラクター）, 名鉄運輸のキャラクター（固有名詞は無い）, ディズニーテーマパークのキャラクターとして新たに創作された「ディズニーベアー」, 子ども服の製造販売会社であるミキハウスやファミリアの「くま」キャラクター（ファミリアのキャラクター名は「ファミちゃん」「リアちゃん」）など, 「くま」を用いたキャラクターは枚挙にいとまがないし, 「くま」を用いた絵本は次々と新しく創作されて計数不可能である。童謡の世界にまで目を広げれば, 子熊を人格化して歌にした「あめふりくまのこ」は幼児に絶大な人気を誇る歌として長く歌われている楽曲である。キャラクター化するに当たり, 「くま」が他の追随を許さない何らかの魅力を秘めているということは, 疑う余地のないことのように思われる。

しかし, ひるがえって「熊」という動物そのものを考える時, それは必ずしもキャラクターに直結するイメージだけに彩られる動物ではないことも確かである。成長した熊の個体は地上生活を主とする哺乳類の中で最も巨大であり, その破壊力はあらゆる地上の動物の脅威である。勿論その脅威は人間にも及ぶものであって, 現代日本において人里に出没し人間を襲う熊のニュースは後を絶たない。近年の日本だけではなく, 開拓時代の北米における灰色熊（グリズリー）の存在は人類の恐怖の対象とされ, 絶滅に追い込まれるほどの熊の大量殺戮が展開したことは周知の事実である。著名な野生動物研究者や自然動物写真家などが熊の襲撃によって命を落とす事件もしばしば耳にする。そのような恐ろしい生態の一面も有する熊が, 恐怖の対極にある「かわいい」キャラクターへと変容するのは何故だろうか。キャラクターとして多く採用される他の動物としては, 犬, 猫, 兎, 鼠, 猿, ペンギン, 魚などが挙げられ, これらの動物のキャラクター化への過程も夫々独自の特徴があるので, その過程について一括して分析することはできない。総じて見るにキャラクター化される動物は, 元々の形態からして全体的に小型であり, 凶暴性を秘める動物は殆ど皆無であると言える。キャラクター化される動物の中で異色の存在である熊。

熊がキャラクター化されやすい理由として我々は, 次のような点を容易にイメージすることができる。すなわち, 成人した個体に比べて生後数ヶ月までの子熊は非常に小さく, 人間が「愛らしい」と感じる要因として誰もが想像するところの「丸っこい」「むくむくした」といった形態的特徴を備えている点。また, 熊は後肢を用いて二足歩行し立位を取ると共に, 前肢を器用に用いて子熊を抱いたり食物を食べたり, 指を用いて物を摘んだりするといった, 人間の形態を連想させるような動きをする点。加えて, 体型は全体に肥満したように見え, 短足であり, 目鼻は顔面の前部に集中して額部が広く, 頭部全体も横幅があり丸みを帯びている点。子熊が歩行を開始する時期の動きが乳児のほふく前進から歩行への移行に似た動きである点など, 数々の形態的特徴を総合して見ると, 「子熊」は愛らしいという印象を人間に与える特徴を備えている。また, 母熊が子熊を非常に可愛がり, 人間のように抱いて母乳を与えたり, 子熊の自立まで自らの命に代えても子熊を守り育てる姿

人格化される熊(1)

も、写真集やドキュメンタリー番組などで良く見られるものであって、熊の親(母)が子(仔)を養育する姿が人間と類似して見えるという点も、熊を容易に人格化させる要因であり、大きな母熊に寄り添う小さな子熊の姿も、子熊を更に可愛らしく見せているのである。

本稿においては、この野生の熊のもつ魅力を生態学的に分析すると共に、その形態をもとに作成される三次元キャラクターである「くま」のぬいぐるみの魅力について分析する。

この二つの視点から、キャラクターとしての「くま」の魅力の源泉について裏づけることを試みるのが、シリーズ(1)である本稿の目的であるが、もとより筆者は本稿で参照する各種先行研究が立脚するところの動物学、移行対象の研究、心理学を専門とする者ではなく、幼児教育方法を専門とする者である。そのため、本稿における論考は、一次資料に基づく専門的考察の展開には至っていない。しかし、児童を含む人間を取り巻く物的環境の一つとして重要であり、また直接的に自己に働きかけてくることがないにも関わらず身近に置くことを希求して止まなくなるキャラクターの魅力を、他領域の幅広い研究成果を用いて追究することは、幼児教育方法の一要素である物的環境を考察するうえで非常に重要な意義をもつと考え、研究ノートとして整理することを試みた。他領域の研究成果の推考は容易ではなく、また本ノートでは十分にそれらの深淵に踏み込んだ考察に至っていないが、各領域の研究成果の一端を紹介し、それらの成果を総合的に用いて考察することに意義があるかと考えた。すなわち諸兄の示唆を得る契機を提示することによって、今後の考究の糸口とするための一稿としたい。

なお、本稿においては基本的に、動物としてのクマには「熊」という漢字を用い、キャラクター化されたクマについては「くま」と平仮名を用いて表記することとするが、章によって若干の用法の違いがあることを最初に述べておく。

第1章 熊の生態

本論稿の最初である第1章では、熊の生態の特徴について述べる。「くま」が多くキャラクター化される要因の一つとして、熊という動物自体が有している生態に魅力があるのではないと思われるからである。

熊というと、様々なイメージが湧く。それなりにニュースにもなり、本稿で注目しているように「キャラクター」化されて様々な場面に登場する熊である。しかし、その生態は、実はあまりよく知られないままではないだろうか。

ここでは、動植物の研究者で著名なシートン(E. T. Seton, 1860~1946)の著作『シートン動物誌』第4巻「グリズリーの知性」を用いて、熊の生態的特徴を簡略にまとめる。無論、ひとことで「熊」と言っても、その種類は多く、種類によって特性もあるので、一括して述べることは本来不可能なのであるが、ここでは種別に詳細に紹介することは省略し、その概略を紹介するに留める。なお、

シートンの上記著書の和訳本では「クマ」というカタカナを用いている。動物の科として標記する場合、「クマ」とカタカナを用いるものであるためと思われる。そこで本章では、『動物誌』に倣い、動物としての熊を表現するに際して「クマ」というカタカナ標記を用いることとする。

1. 形態的特徴

クマは、「食肉目クマ科」に属する。クマは身体が極めて大きく、体色は大体、暗色をしている。足と手の裏だけは毛が生えず多少とも皮膚が露出するが、他の部分は濃い体毛に覆われている。ホッキョクグマ属のみは足裏にも毛が密集し、一年を通して毛色は白い。四肢にはそれぞれ完全に発達した5本の指があり、後ろ肢は蹠行性（かかとを地面に付けて歩く歩き方）である。尾は短く、耳は短く丸みを帯び、身体の大きさは種により異なる。グリズリー（灰色クマ）は全長2000ミリ・体重200キロ程度、ヒグマは全長2400ミリ、体重500キロ程度、アメリカグマは全長1600ミリ、体重150キロ程度、ホッキョクグマは全長2000ミリ、体重350キロ程度であるが、個体差が大きく一概ではない。近年、日本で人間の集落に出没して騒動を呼んでいるヒグマは、クマの中で最も身体の大い種である。側面から見た顔のラインは種によって異なるが（図1参照。参考文献『シートン動物誌④』p.41所収「図2」を転載。上よりグリズリー、ヒグマ（牡）、アメリカグマ（牡））、いずれも鼻先が意外と長い。たてがみ状の毛の生えた背と、両肩の間には隆起部があるのも、クマの特徴である。全体的に胴体は太く、後ろ肢は短めであるが、前肢は長い。前肢の手先は非常に器用であ

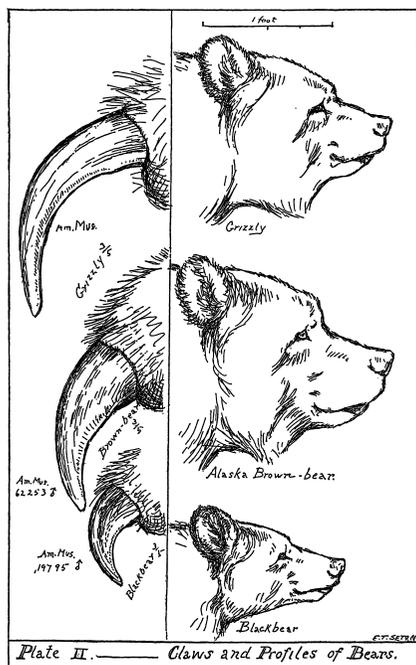


図1 「クマ類の鉤爪と頭部の輪郭の違い — アーネスト・シートン画」
 (出典：『シートン動物誌』(参考文献一覧所収))

人格化される熊(1)

り、指先二本を使用して物を掴むことも出来る一方、その腕力は強力で、ひとふりで人間をずたずたに切り裂くほどの力を持っている。腕の力も勿論ながら、鋭い爪は最も危険な道具となる。

クマは、四足歩行のほか、様々な体位を取る。うつぶせ、横座り、横寝、あおむけ、エンコ座り、二足直立に、短距離であれば二足歩行も可能である。子グマは木に登るが、成人したクマは木登りはしない。

グリズリーは、アメリカにおいて大量の狩猟がおこなわれ殆ど残存していないが、カナダとアラスカには生存している。

2. 生態的特徴

クマは、なんでも食べる。どの種のクマも、食べられないものは殆ど無い。グリズリーは、草、植物の根、木の実、昆虫、はちみつ、ヘビ、カエル、魚、鳥、ネズミ、ヒツジ、ウシ、死んだ動物も食べる。ヒグマは主として草食で、野ネズミも食べ、サケも大好物であり、サケの季節にはサケを大量に食する。クマは成人すると、その一生の殆どを単独で暮らし、集団生活をおこなわない。繁殖期は短く、僅か一ヶ月程度であって、繁殖期の後に別れたオスとメスは二度と会わないことも多い。出産、育児は全てメスの仕事である。

本質的には用心ぶかく、内気で、無害な動物であるが、クマは危険で獰猛だという俗説が世にはびこっている。重傷を負ったクマが追い詰められた時や、ワナにかかった時、子グマを連れた牝グマが怒っている時は、非常に危険である。他の動物であっても獰猛になるような状況では、クマの場合は一層危険である。

3. 母グマによる子グマの子育て

クマは大抵、2～4頭くらいの子グマを同時に出産するが、これも一概には言えない。子グマは親に比べて非常に小さく、どの種のクマにおいても生後数十日までは目も開かない。殆ど赤裸状態であるが、うっすらと毛が生えている。体重は種によって異なるがヒグマでも1キロもなく、アメリカグマの子どもは300グラム程度である。体形は、小さいながらも、親の持つ頭の形、肩の隆起、足の形などの特徴をもつ。人間の子どものように鳴き、においを嗅ぎまわったり、かんしゃくを起こして叫んだりする(グリズリー)。

シートンの記録は、ワシントン国立動物園の生後9週間のグリズリーの母子の授乳の様子を、次のように描写している。

「子グマはクンクンと鳴き声をあげ、なんとか母グマの乳首に吸いついて乳をもらおうとがんばっていた。うしろ足で立ったり、母グマの脚にしがみついたり、母グマの毛を引っぱったり、さらにはたがいに横つらを張りとはばしたり、うなったり取っ組みあったりして、地面をころげまわった。そしてときにはありったけの大声を出し、クマのことばでこう叫んだ。『お腹がすいたよ、ママ、

ママ、ぼくたち、お腹空いたよ!』。ようやくその気になった母グマは、子グマを押しつぶさないように場所を選んでゆっくりと、注意ぶかく身をかがめた。そして、ここぞとばかりに押し寄せる子グマたちのなかにしっかりと腰をすえた。母グマは広い肩が床につくまで、ゆっくりとからだをうしろに倒した。毛むくじゃらの子グマのきょうだいはたいへんな騒ぎで、顔をたたいたり、耳をぶったり、背なかをかんだりしながら叫んだ。『こことった!ここはぼくの場所だよ!ぼくが最初に見つけたんだ!』『違うったら!それは私の!自分の場所に行ってよ!』四頭の子グマはそれぞれ乳首に吸いつきながら、それでもまだクンクンと鳴いていた。』⁽¹⁾

ここには、子グマの愛らしい様子と、子グマを大切に育てる母グマの様子が描かれているが、特にシートンが子グマを描写する時に、子グマを人格化した表現をとっている点に注目したい。あたかも、お互いに話し合っているかのように見受けられる愛らしさを、シートンは子グマに見たということである。ちなみにグリズリーは、子グマのときに捕らえて人の手で育てると、完全に飼いならすことも可能であるという⁽²⁾。「インディアン」⁽³⁾は、捕らえたグリズリーを家族の一員のように育てることもある⁽⁴⁾。

また、同じシートンの著書には、母グマ（アメリカグマ）の子グマに対する愛情の深さを示すエピソードも幾つか見られる。ある箇所ではマサチューセッツ州での出来事が示され、母グマの様子が明らかにされる⁽⁵⁾。二頭の子グマが食物を探しているのを見かけた男が、子グマは儲けになるので、その子グマを袋に入れて持ち帰ろうとしたところを母グマに見つかった。母グマは追いかけてきた。男も走って逃げた。クマは家までついてきたが、男は母グマの鼻先で扉を閉めた。母グマは、ドアの外で、あたかも「子どもを返して—子どもを返して。あなたには何もしません」⁽⁶⁾と言っているかのような声で鳴き続けたが、最後には悲しそうに立ち去ったという。他にも、やはり子グマを捕獲された母グマが、「男たちが馬車に乗りこみ、走り出すと、母グマは道に立ち、いつまでも見おくっていた」⁽⁷⁾（アメリカグマ）というエピソードや、「子グマを連れだした母グマは、巣穴を出て六週間から八週間は、子グマにひと吹きでも冷たい風を当てたら死なせてしまうと考えている、と思えるほどいつもたいせつそうに子グマをからだのしたに隠して動く」⁽⁸⁾（アメリカグマ）という説明も示され、母グマが子グマに非常な愛情を注いでいることが明らかになっている。

続いて示す二箇所の表現は、特にクマの子育ての様子を掴むのに有益なものである。

「この時期の母グマが見せる子グマへの気くばりと、子グマが母グマへ寄せる信頼は、一つの理想であるように思える。多くの記録にのこされている母子の関係の情景の描写は、人間的で、時には、あまりに感動的だ。」⁽⁹⁾。（アメリカグマ）

「人間でもけものでも、生命や健康を大事にする冒険家ならだれでも、けっして母グマに近づかないようにするだろうし、彼女の横をよちよち歩く二頭の真っ白なぬいぐるみのような子グマを、どんなかたちにせよ脅すようなことはしないだろう。子グマを守るためなら、母グマはいくらでも勇敢になれる。この四つ足の、いたずら盛りの真っ白な子グマたちのためなら、母グマの体力も忍耐

力も際限がないように見える。くつろいでいるホッキョクグマに出会った多くの北極探検家はだれもが、母グマが子グマに示す、あくことのない、精魂を傾けた愛情と献身をじつに生き生きと描写している。」⁽¹⁰⁾ (ホッキョクグマ)

献身的に子育てに励む母グマの様子が示されているが、特に428ページの文には、子グマの非常に愛らしい様子も併記されている。シートンも「ぬいぐるみのような子グマ」という表現を用いて、ホッキョクグマの子グマが「ぬいぐるみ」と見まごうような外見をしていることを示しているのである。

次に、シートンの『動物誌』以外の著書で描かれている母グマと子グマの様子についても、少し見てみよう。ここでは二人の作家の文学に現れている母グマと子グマについて紹介する。

児童のための動物文学の作者として有名な椋鳩十(1905~1987)は、1942年(昭和17年)、児童向けの動物文学シリーズにおいて熊をモチーフにした「月の輪グマ」を著した。椋は長野県下伊那郡に生まれ、父は牧場を営んでいた。幼少時より伊那山系の山々に囲まれた環境の中で、自然や動物に親しみながら成長した。中学~大学時代には、山々を歩き、狩人とも親しく交わり、動物文学を生み出す素地を育てたという。椋の書く動物文学は、もちろん椋による創作童話でありドキュメンタリーではないが、椋自身が見聞きした真実に基づいて創作されており、動物の生態を相当に反映したものとして評価が高い。

「月の輪グマ」は、母グマと二頭の子グマとの物語である。子グマの様子の正確な描写と、母グマと子グマの愛情関係を感動的に描いた小品である。

この書中における子グマの様子の描写には、次のような記述が見られる。「子グマは庭のカキの木につながれて、あかちゃんのように、両足をなげだしてすわっていました。そして、短い木のきれはしをもって、地面をピタピタとたたいてあそんでいるのです。そのむじゃきな顔つきといい、動作といい、それはけものというより、いたずらぼうずといったかっこうでした。あんまり、そのようすがかわいらしいので…(後略)」⁽¹¹⁾「それは小さな、片手でもてそうな二ひきの子グマが、よたよたとついていくのです。毛並みのむくむくした、おもちゃのクマみたいな、かわいらしいやつです。」⁽¹²⁾「二ひきは、ちょうど人間が、すもうをとるときのように、組んだままで、ころころところがっていきました。クマの子は、人間の子どもににている、とよく狩人たちはいうが、まったく、いたずらぼうずそっくりです。」⁽¹³⁾これらの記述を見ると、子グマが、どのような風貌で、この物語に登場する「わたし」に「可愛い」という感情を湧き起こさせているかが明らかである。子グマは非常に小さく、毛で覆われていて、歩き方はよたよたと危なっかしく、座れば人間の「エンコ」のような格好になる。話の中に登場する狩人たちも、子グマは人間の子どもに似ていると述べたと記されていて、「わたし」のみならず狩人すらも「可愛い」と思わせてしまう魅力が、子グマにはあることがわかる。それは単なる形状のみならず、子グマが遊ぶ様子もまた人間の子どもを彷彿とさせるようなものであることが明らかである。

この物語は、「わたし」と、同行した案内人との二人が、子グマの可愛らしさに魅せられ、母グマから子グマを盗もうとする様子が描かれる。そして子グマが危険に晒された時の、母グマが子グマを守ることへの執念が描かれている。最終的に子グマの捕獲は失敗し、命がけで子グマを守ろうとした母グマは大怪我をしながらも、二頭の子グマと共に森へ帰っていく。その母グマの、子グマを守る思いのすさまじさ、子グマへの愛情の深さは驚くべきであり、クマという動物の母子関係が特別なものであること、人間の母子を連想させるほどであったことが描写されている。

ついで、アメリカの動物作家ロバート・レスリー (R. F. Leslie, 生没年不明) の著書に見られる記述を見てみよう。レスリーは、その著書『はるかなる仔熊の森』(1968)の中で、年老いた義母グマから三頭の子グマを預かり育てた記録を示しているが、それには、子グマの行動が大変に人間くさく、愛さずにはいられない感情を掻き立てるほど魅力的であることが記されている。ちなみに、クマの種類は不明である。以下に、レスリーによって書かれた子グマの様子を一部、抜粋する。

「ラスティ (筆者注：子グマの名前) はまず湯気をたてている私の靴下の匂いを嗅いでから、後脚で立ちあがり、慎重な態度で椅子に近寄ると、両方の前脚を私の膝にのせた。私は、少なくともしばらくのあいだは、知らん顔をしていることにしたが、熊というものは、象や王蛇と同じように、無視しておくことがきわめて困難な動物で、ことに愛情に飢えている時はなおさらである。注意を惹くために私の足に爪をたて、ラスティはじっと私を見あげている。(中略) 仔犬のような頭を掻いてやり、大きな丸い耳のあいだに手をおいてやると、ラスティはあおむいて、膝に抱きあげてくれとせがんだ。抱きあげてやると、膝の上で何度かぐるぐる回り、やがて私の表情がよく見える位置に腰を落ちつけた。」¹⁴⁾

ここに記されているような様子が見られるならば、子グマを育てた経験のある人間や、子グマを間近に見た人間は、子グマに対して、人間の子どもに対しても似た愛情感情を抱くであろうと考えられる。

これら二編の動物文学を見ると、クマが他の動物とは異なる、独特な魅力を持つ動物であることが明らかである。子グマの持っている極めて愛らしい外見と、人間くさく、心が通じるような態度。その子グマを献身的に愛し守り育てる、毛に包まれた大きな身体の母グマが子グマを抱く姿と子どもを見つめる目。その全てが相俟って、子育てをするクマの姿は、人間の母親が可愛らしい子どもを慈しんで育てている様子を連想させる。人間のような様々な体位や動きをとるクマの生態も、その気持ちを一層助長させるのである。

本章での考察を通して、クマがキャラクター化されやすいことの大きな要因が明らかになろう。すなわち、まず、その容貌や動態が人間のそれを連想させることにある。しかし、それだけならば、人間に最も近い種である類人猿も同様の条件を有していることになる。にも関わらず、クマがサルよりもキャラクター化される数が多い理由として、特に子グマの容貌や動態が非常に愛らしく、人間の心を捉えて離さないことがあると考えられよう。

第2章 立体的造形キャラクター「ぬいぐるみ」としての「くま」

1. 「テディベア」の起源と特徴

「くま」が、ぬいぐるみの代表格としての地位を築いていることは、多くの人々の認めるところであり、前述のとおり (p.77) である。立体的な造形キャラクターとしても多種多様な動物を模った「ぬいぐるみ」を含むおもちゃがあるが、それらの中で「くま」のぬいぐるみは、多くの人々を魅了し、人々の生活の中に深く浸透しているものの一つである。おもちゃ研究者であるA. フレイザーの著書『おもちゃの文化史』は、多様なおもちゃの役割と意義と共に具体的なおもちゃを古代から現代まで掲載して概観した書であるが、その巻頭でフレイザーは「私たち自身の子ども時代のありありとよみがえってくる記憶の中の大好きだったぬいぐるみのクマは、心理学者の言うようにさわって快感を得る布というような意味のものではなく、まさに子どものころの夢を分かち合う無二の親友だったことでしょう」¹⁵⁾と述べ、書中において記載される全てのおもちゃの中で最初に「ぬいぐるみのクマ」を挙げている。加えてフレイザーは同書において「ぬいぐるみのクマ」のことを「子ども時代の真の仲間」¹⁶⁾とも述べていて、フレイザーが「くま」のぬいぐるみに対して格別の思いをもっていることが想像できる。一方、イギリスの発達心理学者であるニューソン夫妻は、その著書『おもちゃと遊具の心理学』において「動物のぬいぐるみ」について3ページほど短く触れている。「子どもは、たいてい自分の心の中に数個の動物おもちゃをすまわせている。やがてその中で特に一つが子どもの心をとらえるようになり、その子が大人になるまで、ずっと愛情をひとり占めするようになる」¹⁷⁾という冒頭の書き出し文に始まる節においてニューソン夫妻は、「抱きしめるおもちゃは、まず第一に抱けることが必要だ。(中略)これは、熊のぬいぐるみが非常に成功している理由の一つである。というのは後足で立つようになっていて、抱きしめるときに、熊ちゃんとその持ち主の間には邪魔になるものは何もないからである」¹⁸⁾と述べ、動物おもちゃとしてのぬいぐるみのなかで熊が最高であることと、その理由とを、彼らなりの視点から強調しているのである。

上記の2著書における叙述に象徴されるように、我々にとって「ぬいぐるみ」と言えば、誰もが容易に「くま」のぬいぐるみの存在や形態を思い浮かべることができるだろう。

ところで、「くま」のぬいぐるみと聞いて誰もがイメージするのは、「テディベア」という一つの名称である。その語源や起源、どのようなタイプのぬいぐるみを「テディベア」と呼ぶのかなど、一般に漠然と理解されていると思われる。1では、その起源と特長について、改めて再確認しておこう。

我々は、ごく日常的に「ぬいぐるみ」という言葉を使うが、それが、柔らかな布、あるいは、けばだった布で覆われた、動物を模したおもちゃであることは誰もが知っていることである。今日では非常に身近なものとなり、子どもの周りには常に存在しているぬいぐるみであるが、この柔らか

な動物おもちゃの起源は、実は、そう古いものではない。前掲書においてフレイザーが明らかにしたところによると、西洋におけるおもちゃは、15世紀にあった手足の動く人形は木製であり⁽¹⁹⁾、その後18世紀に至るまで、人間を模った人形は全て木製であったという⁽²⁰⁾。人形は木製ながら、手足は心棒が通してあって、手足を動かすことができたそうである。19世紀半ばになると、汽車のおもちゃがアメリカで生まれたが、それはブリキ製だった⁽²¹⁾。我々が想像する「ぬいぐるみ」が誕生するのは、19世紀の終わりのことであり、ぬいぐるみの歴史は、古いものではないのである。

熊のぬいぐるみが誕生した歴史について考察する時、テディベアの名称が、第26代米国大統領のセオドア・ルーズベルトの愛称に由来していることは、おそらく多くの人が知るところである。テディベアに関する専門書は多数出版されており、その愛好者の多さを物語ると共に、テディベアという名称の曖昧性をも示している。

オーストラリア在住のテディベア史研究者であるポーリーン・コックリルによれば、「くま」が童話やおもちゃとして用いられたのは19世紀末に端を発する。ヨーロッパや北米では、曲芸する熊をモチーフにしたぜんまい仕掛けの木製の熊（フランス）や、木彫りの熊（ドイツ、スイス、ロシア）などが見られたという⁽²²⁾。

1901年、愛称「テディ」であったセオドア・ルーズベルトが第26代米国大統領に就任。1902年11月に狩りに出かけた彼は、彼のためにハンターが追い詰めた熊を撃つことを拒んだ。この逸話は、政治家クリフォード・K・ベリーマンによって風刺漫画に描かれワシントン・ポスト紙（同年11月16日付）に発表された。その後、ロシアからの移民であったモリス・ミヒトムが、ルーズベルトに手紙を書いて許可を得たうえで、妻ローズが手作りしたフラシ天の熊に「テディベア」と記したラベルを付けてニューヨークの自分の店に陳列。大人気となり、卸売商バトラーブラザースが在庫を買い占める。ミヒトムはバトラーブラザースのバックアップによって、アイディアル・ノベルティ・アンド・トイ・カンパニー社（1903～）を創設した。すなわち、ルーズベルトの愛称に由来した「くま」のぬいぐるみである「テディベア」の最初の製作者はローズ・ミヒトムであり、テディベアの最初の制作会社はアイディアル・ノベルティ・アンド・トイ・カンパニー社であると、コックリルは発表している。ゴールデン・モヘアと呼ばれる最初のベアは、座った時の高さ49cm、楔形の鼻づらと三角形の顔、盛り上がった肩、背中のごぶ、長く先細の腕、足には5本、手には4本の爪、毛足の短いゴールドのモヘアのファーに、木毛の詰め物による硬い胴が、最初のアイディアル社ベアの特徴である。

一方、アイディアル・ノベルティ・アンド・トイ・カンパニー社のテディベアがアメリカで販売され、テディベアへの関心が米国で高まっていた頃、ドイツでは、かのシュタイフ社が、ぬいぐるみの開発に取り組んでいた。シュタイフ社の草創期についてシュタイフ社は、次のように紹介している。マルガレーテ・シュタイフによってギンゲンに創立されたシュタイフ社（1890～）は、1880年にマルガレーテが発想して作ったフェルト製の象のぬいぐるみ（当初の用途はぬいぐるみではな

人格化される熊(1)

く針刺しだった)の製作から出発した。この象が、一般に我々がイメージするところの、柔らかな布で作られた「ぬいぐるみ」が幾つも作られ発売された最初のものである。やがて、ぬいぐるみ製作会社となった後の1893年には5,000体以上のぬいぐるみを製作しており、1893年にはライプツィヒ・メッセに参加した。1897年、マルガレーテの甥リヒャルドが、シュツットガルトの美術学校を卒業して入社したが、リヒャルドは動物園やハーゲンベクシェン動物サーカスでスケッチした絵をもとにぬいぐるみをデザインし始めた。リヒャルドの描画をもとに開発された「くま」のぬいぐるみは、デッサンに描かれたように手足が長く、手足が自由に動くようにジョイント式で手足を繋ぐ形態であった。リヒャルドが開発した最初の「くま」のぬいぐるみ「55PB」は、1903年のライプツィヒ・フェア(ママ)に出品された。その場に来ていたニューヨークの玩具卸売業者ジョージ・ボグフェルト・アンド・カンパニー社のヘルマン・バーグは、この熊に目を留め、3,000体の55PBを注文したのである。55PBのベアは、座った時の高さ55cm、フラシ天(Plush)で作られ、動かすことができた(Beweglich)。長く尖った鼻づら、盛り上がった肩、丸みのある背中と上部のこぶ、大きな足、長い腕、毛足の短い薄茶色のモヘア、木毛の詰め物による硬い胴体、手と足にはステッチによる4本の爪などが、その特徴である。55PBは大西洋を渡り「テディベア」と称されて米国に上陸。ルーズベルト大統領令嬢の結婚パーティーの飾り付けに使用されたので知られるテディベアは、前記のアイディアル・ノベルティ・アンド・トイ・カンパニー社のもではなく、海を渡ったシュタイフ社のものであった。シュタイフ社は、この1903年を「ベア年」(Barenjahre)と呼んでいる。シュタイフ社は当初55PBを作り始めた頃はドイツ社会から見向きもされなかったが、アメリカ上陸以降シュタイフ社は、「くま」のぬいぐるみの製作によって劇的な事業の飛躍を遂げたとコックリルは述べている。シュタイフ社は、55PBの後もテディベアの改良・創作に努め、1905年には、それまでは木毛のみであった詰め物にパンヤを加えて、柔らかく軽いベアを開発した。この、PABとナンバリングされたベアは腕が短めで、親しみやすい表情に丸みを帯びたフォルムを有し、「獐猛な熊から本当のおもちゃの動物、抱きしめたり触ったり可愛がったりするのに適した、まさに“人形のような”現在製造されている大半のテディベアの原型ともいえる、クマのぬいぐるみが誕生」²³したのである。

ちなみに、正統的テディベアの最初の製作はアイディアル社ではなくシュタイフ社であるとする説もあり(若月 1998)、研究者によって諸説が入り混じっている現在である。

20世紀初頭にアイディアル社とシュタイフ社によって、くしくもほぼ時を同じくして開発されたテディベアは、いずれもジョイントによって手足と首が動くものであった。先に述べたように、マルガレーテ・シュタイフによって初めて製作され、その後シュタイフ社によって量産された「ぬいぐるみ」は、柔らかな布で覆われていたという点で斬新であったものの、伝統的な木製の人形に導入されていた「動く手足」は、当時のぬいぐるみには導入されていなかったのである。20世紀初頭に出現した熊のぬいぐるみ「テディベア」は、ぬいぐるみの特徴である「柔らかな布に覆われた動

物」という点に、伝統的な木製の人形の持つ特徴であった「動く手足」という点を加えたものであった。すなわちテディベアは、動物のぬいぐるみでありながらも、人形の特徴である「動く手足」を持つようになったのである。このことにより「テディベア」は、単なる動物の姿かたちを模したぬいぐるみから、人間的な動きをもつ人格化された「くま」のぬいぐるみへと変貌したと考えられる。この新しい「くまのぬいぐるみ」製作技法の誕生は、人間的な動きをする熊の生態や、人間の母子のような愛情に満ちた熊の子育ての姿と相俟って、テディベアを他の動物のぬいぐるみと一線を画する存在へと変化させた大きな要因として見落とせないことであろう。

さて、アメリカでもテディベアの市場に足場を確立したシュタイフ社は、競合する米国メーカーとの競争の渦中に置かれる。米国でもドイツでも、米国のテディベア市場に売り出すためのテディベアのメーカーが続々登場するが、いずれも長続きすることは稀であった。テディベアの流行は、ルーズベルト大統領が政権二期目にピークに達する。1900年代末にはイギリスにもテディベア流行が飛び火、1908年にジョン・カービー・ファーネル社（1897～）が、英国製で初の、フラシ天のジョイント式ベアを製造した。ファーネル社は、ヘンリー・ファーネルとアグネス夫妻が、父親であるJ. K. ファーネルが他界した後にぬいぐるみを製作し始めた時にスタートした会社であった。ファーネル社が初めて製作した当時のテディベアは、形態の特徴が前掲2社とは大きく異なっていた。すなわち、高さは48cm、四肢は短く特に腕は極端に短い。胴体は細長く、背中に隆起は無かった。ファーは毛足の短いゴールド色のモヘアであった。ちなみに、A. A. ミルンによって1926年に著された『くまのプーさん』において「プーさん」のモデルとなったテディベアは、このファーネル社製作のアルファ・ベア・シリーズのものであったとコックリルは判断する。ミルン夫人が、息子クリストファーの一歳の誕生祝いのために、ロンドンのハロツズのおもちゃ売り場で数あるテディベアの中から選んだのが、金色モヘアを持つファーネル社のベアだったのである。「プーのウィニー」と名づけられたベアは、クリストファーと共に多くの写真に撮影されているほどに、クリストファーに愛された。（プーに関する詳細は本研究ノートシリーズ（2）にて述べる）。アルファ・ベア・シリーズは1920年代初頭に発表され、30年代にかけて製作されたものである。スタイルは初期のシュタイフ社のものと似ており、本物の熊そっくりの突き出た鼻、隆起した背中、長い先細の腕とスプーン型の手などは初期シュタイフ・ベアと酷似する。高さは55cm、ファーは上質のモヘアのフラシ天。頭の詰め物は木毛、胴体はパンヤと木毛の混ぜ物、四肢はパンヤであった。

その後、テディベアは西欧各国、そして日本などで、様々な形態となって拡大発展していくのであるが、「テディベア」という名称は、どこの会社によっても登録商標化されることはなかった。そのため、この名称は、「くま」のぬいぐるみの代名詞であるかのように一般名詞化して使用されることになる。テディベア作家である赤田はつ子は、その著書『いつもとなりにテディベア』（2001）の中で、テディベアの条件として以下の3点を挙げている²⁴⁾。

人格化される熊(1)

- ① ジョイントが付いていて手・足・頭が動くこと。
- ② 天然の素材，モヘアを使っていること。
- ③ 背中にコブがあること。

加えてテディベアは一体ごとに手作りされるものであるから，その形態も顔も個々に異なる。赤田はテディベアの更なる特徴として，「顔が命」⁽²⁵⁾とも述べている。「うまくいくときはよいのですが，いかないときは何回も何回もやり直す」⁽²⁶⁾と，量産品ではないテディベアの看過できない特徴として「顔」すなわち表情なども重要であることを指摘している。

また，山中湖テディベアワールドミュージアムの定義するところによれば，「本物」のテディベアの条件として以下の3点を挙げる。

- ① ジョイントにより手・足・首が自由に動く。
- ② 高級モヘア（天然アンゴラ山羊の毛）の生地で作られている。
- ③ 一流の職人による手作り。

さらにシュタイフ社は，次の3点を条件として提示する⁽²⁷⁾。

- ① 素材はアンゴラ山羊の毛のモヘア，またはそれに近いものが使われていること。
- ② 首・両手・両足の5ヵ所にジョイントが使われて動く5ジョイントであること。
- ③ 本物のクマよりも両手が長く，人形に近いプロポーションをしていること。

いずれを見ても，正式な意味での「テディベア」と呼ばれるためには，幾つかの条件があることがわかるが，上記いずれの定義を見ても①②は共通しており，③だけが異なっている。

とは言え，赤田は，「くまのぬいぐるみならテディベアと呼んでもいいのではないかと思います。絶対の定義などはないのです（中略）テディベアとは，持つ人が心から愛して，一生抱きしめることができるベアを呼ぶのだと私は思います」⁽²⁸⁾としたうえで，上記の三つの条件を厳密に満たすものでなくても，「くま」のぬいぐるみを総称して「テディベア」と呼んでもよいのではないかと定義する。ミュージアムも「クマのぬいぐるみ全般をさして『テディベア』と言っても間違いではない」と言う。なるほど，前掲『テディベア図鑑』⁽²⁹⁾には，カウント不可能なほどの大量のテディベアが古今東西に亘って掲載されており，コックリルも「テディベア」という名称を，赤田らが挙げた条件を全て有しているものに限定して使用しているのではなく，「くま」のぬいぐるみを総称して「テディベア」と呼んでいることが明らかである。

そうは言えども，ミュージアムは，テディベアを特徴づける点を「手ざわり，しっかりした硬い作りが，いわゆるぬいぐるみとの違い」であるにとらえている。

総合的に考えると，「テディベア」という名称は，厳密に言えば狭く限定された「くま」のぬいぐるみを呼ぶものであるけれども，広く拡大してとらえて「くま」のぬいぐるみ全般を指すものと理解することも可能なようである。

今日では，これら3社の他にも多くのテディベア製作会社が存在する。しかし，それらの中に

あって上記3社は、テディベア製作の老舗として、テディベアの創造と発展に寄与し、テディベア開発を牽引し続けている。1900年代半ばになると化学工業の発達により、天然素材ではない化学素材を用いたテディベアも出現するようになった。合成繊維（ナイロンなど）のフラシ天、ポリエステルやウレタンの詰め物は、テディベアの感触を柔らかくし、ジョイントがなくても動く手足を実現した。繊維の改良や製法の研究により、家庭で洗濯できる素材や製法を有するテディベアも誕生した。合成繊維が用いられるようになり、量産がおこなわれるようになって、値段も安くなり、広く一般の人々も買い求めやすくなった。全体がふわふわした柔らかい感触を持つ「抱き心地」の良いベア、洗濯可能で衛生的なベア、さらには小さなパーツの誤飲への配慮もされたクマのぬいぐるみの出現は、テディベアを、乳幼児期から与えることのできるものへと変容させた。今日、抱くことを目的として製作されたぬいぐるみは、「抱きぐるみ」とも呼称されるようになっている。

ちなみに、テディベアが我が国に入ってきたのは、古いことではない。筆者が収集したところの、戦前生まれの人物による複数の証言によれば、そもそも広く「ぬいぐるみ」が日本の子どもたちに一般的に愛されるようになったのは第二次世界大戦後のことである。もっとも、マルガレーテ・シュタイフによって最初のぬいぐるみが考案され市場化されたのも1880年（＝明治13年）、テディベアの創作も1903年（＝明治36年）であったのだから、大正～昭和初期（戦前期）の日本の社会的状況下において、「ぬいぐるみ」一般や、とりわけ第2章の3で見たように日本古来の農耕社会・都市社会において親和性の低かった熊を模したテディベアが、日本に渡来し一般に広がるには相当の障壁があったと考えるに無理は無かろう。筆者が幼少の頃（1960年代）には、ぬいぐるみは一般的なものとなっており、筆者も多くのぬいぐるみを所有していたが、その中でも最も「お気に入り」だったぬいぐるみは「くま」のぬいぐるみであった。しかし、そのぬいぐるみは正統的なテディベアではなく、ナイロンのフラシ天に、ポリウレタンか何かと思われるフワフワした詰め物で作られたもので、両手両足を全開した状態のものであり、強いて言えば1960年代後半にイギリスのウェンディ・ボストン社によって製作された丸洗いできるベアに似ているものであった。正式なテディベアが広く日本に入ってきたのは、先の赤田はつ子によれば、「今から二十年前」³⁰であり、十五・六年前は殆ど街に見かけることはなかったと言う。「今から二十年前」とは1980年初頭と算段でき、街でよく見かけるようになったのは1990年代以降であると計算できる。高価なテディベアが日本社会に広まるためには、日本の経済力の充実・安定や、西洋文化の定着と円熟も不可欠であったのだろう。

2. 「移行対象」の「ぬいぐるみ」として機能する「くま」

さて、1で確認したように、正統的テディベアには幾つかの顕著な特徴がある。それは、詰め物の特性からして胴体自体は硬いにも関わらず表皮が良質のフラシ天で作られているため手触りは意外と柔らかいこと、職人の手作りであり顔が生き生きと見えるよう丁寧に作られているため、抱くと

人格化される熊(1)

人間と向き合っているような錯覚を与えることである。木毛の詰め物で構成されていたテディベアは、素材の持つ性質から、どうしても胴体が硬い感触を持つものとなるのであるが、天然素材のフラシ天のファーで覆われているためか、抱き心地は予想外に柔らかく温かみがある。

ところで、そのような感触を持つテディベア、後に素材の開発により柔らかな「抱きぐるみ」へと拡大した「くま」のぬいぐるみは、発達心理学の研究領域で言うところの「移行対象」の一つと見なされている。もとより移行対象としてのぬいぐるみは「くま」を模ったものに限定されるわけではなく、他の動物を模したぬいぐるみも該当するのであるが、まずここでは広く、あらゆるぬいぐるみの有する移行対象としての機能と役割について先行研究に学んだ後、特に「くま」のぬいぐるみが有する特性について整理する。

「移行対象」(transitional object)という言葉は、イギリスの精神分析医・小児科医であったウィニコット(Winnicott, D. Q., 1896~1971)によって最初に使われ、彼によってその概念の凡そが明らかにされた語である。この「移行対象」の研究者は、まだ我が国では多くは見られない。ここでは、その研究の第一人者である井原成男の編著書『移行対象の臨床的展開』を用いて、移行対象としてのぬいぐるみについて整理する。無論、移行対象研究も奥深く、ここで簡略に述べられるものではないが、本稿の目的に沿った範囲での考究に有用な論述箇所を見ていこう。

ウィニコットは、移行対象のもつ三つの側面として、次の点を挙げた³¹⁾。

「①子どもは、ブランケットであれぬいぐるみであれ、その対象を主観的には生命をもったものとして生き生きと感じている。それは単なる無生物ではなく、彼の心の中ではイメージの世界がふくらんでいる。しかし同時に、それはやはり、単なる物にすぎない。物としての制約や現実性をもっているのである。移行対象はまさに、こうした主観性と客観性を同時に(2重に)もっている(以下、略)。

②移行対象が現れてくるのは、母子の分離が問題になってくる時である。子どもは分離不安に対する防衛手段として移行対象を創造するのである。

③子どもが意の向くままに、自分の願望のままに振る舞っていた(快感原則に支配された)時期から、現実の制約や形を認識するにいたり、私たち大人と同じ世界へと歩み始める(現実原則に支配された)時期への移行期にあらわれるという側面をもっている。」³²⁾

上記3点のウィニコットの移行対象の側面を提示したうえで井原は、「この3つの側面に対応するウィニコットのコンセプト」³³⁾として、井原自身の理解によるものであると断りつつ、九つのコンセプト項目を挙げた。それは順に、1: holding —抱っこに象徴される「満足のいく母親」、2: 生き残ること、3: 一体化している母と子ども (mother infant unit)、4: 思いやり、5: 1人での能力、6: 創造性と遊ぶこと、7: 依存と自立、8: 中間領域、9: 幻想と脱錯覚 である。全てを解説する紙幅の余地がないため一部の紹介に留めるが、母親は「抱くこと」「子どもを大切に扱うこと」「子どもの欲求へのタイミングのよい反応」の三つの機能をもって子どもを抱き①、母子一体化②を

経て、子どもは母親への完全な依存からの自立^⑦を目指す。この段階になって子どもは、初めての自分だけの所有物を持つようになる^⑧。その所有物すなわち移行対象の内容としてウィニコットは、「タオル、タオルケット、ぬいぐるみ、毛布・ふとん、枕、ハンカチ・裏地・フリル・リボン・母親のネグリジェ、おんぶひも・クッション・パジャマ・母親の髪の毛・ティッシュペーパー」などを挙げる。

ここでは移行対象について極く簡単に見たに過ぎないが、移行対象が濃厚な母子関係からの解放のために重要な役割を有していること、それはあくまでも物であるに相違ないけれども、子どもにとっては単なる無生物ではなくなって、主観性と客観性を同時に持つものであることが理解でき、「移行対象」と「母親」には強い関係性のあることがウィニコットによって強調されている。

移行対象と一口に言っても、その中には二種の集合があると井原は説明する。移行対象は、ステイブンソン (Stevenson, O.) により、1歳前後と2歳前後に出現することが発見されたが、彼女は前者を一次的移行対象、後者を二次的移行対象と呼んだ³⁴⁾。次いでアンナ・フロイト (Freud, A., 1895~1982) は、移行対象には感覚的に関わる段階 (母親の身体のもつ感触がおき代えられたものが選ばれる段階) と、人格的に関わる段階 (柔らかいおもちゃが、象徴的な対象として選ばれる段階) という二つの段階があるとした³⁵⁾。すなわち、一次的移行対象から二次的移行対象に進むにつれ、「対象を感覚的に楽しむ段階から、次第に人格的なものとしてとりあつかい、人間的な感情を投影するようになっていく」³⁶⁾のである。さらにホン (Hong, K. M.) は、二次的移行対象の特長として、遊びの対称としての要素がある点、乳幼児が自分の仲間のように扱うという点などを挙げている³⁷⁾。井原は、移行対象となるものには、「ぬいぐるみ、抱き人形、幼児用の毛布・まくら・タオルケット、ハンカチ、タオルなど」があるとしたが³⁸⁾、これらの中で毛布や枕は一次的移行対象、ぬいぐるみや抱き人形は二次的移行対象に分類できよう。

続いて、移行対象は幼児期の発達を説明することにのみ有用であるかという点について、前掲書の中から考察したい。ウィニコットが移行対象の分析において主観性と客観性を同時に持つという特徴を挙げたことは先に示した。移行対象としての物は確かに単なる「モノ」に過ぎない。しかし、その「モノ」は子どもの心の中では生きていくかのようなイメージが膨らんでいる。自由に広げられるイメージと、制約や現実性を持つ「モノ」。彼は、この二面性を「主観性」と「客観性」と換言し、双方を併せ持つ移行対象について「中間領域」という概念を導入したと、井原は説明する³⁹⁾。すなわち「移行対象は、乳幼児の最初の『自分でない』所有物であり、様々な形で現れる。乳幼児にとってこれらの移行対象は、自分の外にあるものとはとらえられていない。この最初の所有物は、乳幼児の主観的世界と、外界との中間領域に位置することになる。」⁴⁰⁾と述べる。そして井原は、この考えを元にウィニコットは移行対象を「生涯発達の側面をもつ」⁴¹⁾と説明すると述べるのである。すなわちウィニコットは、「移行対象自体は、歳を経るにつれてしだいに忘れ去られるが、その要素は健全な発達にもなって拡散してゆき、遊ぶことという中間領域—芸術、宗教、創造的な科学研

人格化される熊(1)

究、夢、創造力に富んだ生活という文化的分野全体に広がっていく。それは、内的現実と外的現実を連関させる現実受容という重荷を、生涯背負い続ける人間にとって、休息地である」⁴²⁾と述べていると、井原は明らかにしているのである。

さて、ここまで、移行対象の意味と原理について簡単に見てきたのであるが、ここで、移行対象として多く活用される「くま」のぬいぐるみ、テディベアの特徴に注目する。

ぬいぐるみは、移行対象のうちでも後期に出現するところの、二次的移行対象の一つである。それは幼児期においては、母親から分離して自立する段階での愛着の代替として機能した後、主観的世界と客観的世界を繋ぐ中間領域に存在する「モノ」として機能するようになると、ウィニコットは説明した。このような機能を持つ二次的移行対象としてテディベアを考える時、子熊を「抱く」ことのできる牝熊の身体構造や、大きく包容感のある牝熊の体型や密集した表毛などの特徴の存在は、我々の興味を喚起する。そのような熊の身体的特徴を反映させて造形されたモノであるテディベアは、人間の母親のおこなう「抱っこ」の形態や、母親自身あるいは母親に繋がる柔らかな感触などに近似したモノとして、幼児に受容されやすいと見なすことができないだろうか。ウィニコットの移行対象からは離れるが、先に本章1の冒頭において紹介した心理学者のニューソン夫妻も、人形なり動物なりの「抱きかかえる」おもちゃには、以下のような特別な役割があると述べる。すなわち「抱きかかえるものを喜ぶ子どもにはそれが非常に根源的な意味で必要なものであるように思える(中略)子どもたちの悲しみや、怒り、そして勝利の喜びを、ときどき気の合った人間とさえわかち合えないことがある(中略)子どもにも、自分が必要とするときにこのようにいつも信頼できて、何も要求しない友だちがあって然るべきではないだろうか」⁴³⁾と夫妻は述べ、ぬいぐるみには人間では果たすことのできない、そして人間にとって非常に根源的な機能あるいは役割があると主張してもいるのである。

一体一体、固有性を持つハンドメイドのテディベアが創作された一世紀前から現在に至るまで、それは「おもちゃ」の領域を超えたものとして了解されるようになっていく。その製作を職業とする作家を生み出し、作家らの技術と思いの粋を注ぎ込んだベアが愛好家たちによって収集・展示され、高額で売買されるようになった。幼い頃に二次的移行対象として愛し親しんだあらゆる種類の「くま」のぬいぐるみは、長じてテディベアと化し、成人した後の人間にとっても、芸術として、創造的な科学研究の対象として、夢や創造力に富んだ生活に欠かせないモノとして、重要な役割を担い続けるものに発展した。

同時に、広義のテディベアは、その表情や、柔らかな感触などが、誰にとっても幼児期の二次的移行対象のような役割を果たすものでもあろう。前掲書において赤田は、「本当にツライことや悲しいことがあったときは、一人ではどうしようもなくなって、心に支えが必要になるのです。そんなときに真っ直ぐな目で『あなたは一人じゃない』って言ってくれる応援団がいてくれたら心強いのではないのでしょうか。たくさんのテディベア作家たちはそんな願いを込めて、一体、一体心を込め

で作っているのです」⁽⁴⁴⁾「ベアたちはずっとパーソナルなオンリーワン、たったひとつの大切なものとして、多くの人たちから心のパートナーとして愛されてきました」⁽⁴⁵⁾と述べている。この記述から筆者は、ベアの所有者にとっては幼児期の二次的移行対象のような機能をなすベアである一方、ベアの作者にとってウィニコットの述べるところの「遊ぶことという中間領域」としての機能をなすという、二つの役割を併有するベアが存在を発見するのである。

赤田の前掲書によれば、臥床生活を送る高齢者に対するアニマル・セラピーに替わるセラピーの道具としてテディベアが用いられているというが、これはテディベアがもつ二次的移行対象のような効果を生かしたものであろう。一方、中学校の家庭科教育課程にテディベア製作を導入している事例も同書に掲載されており、これはテディベアの製作が「遊ぶことという中間領域」として、児童期から青年期への成長段階にある子どもの情緒的発達に効果的に機能することを示唆するものではないだろうか。

本章の最後に、「くま」のぬいぐるみが、あらゆる世代の人間の心を捉えて離さない理由について、考えてみる。

1の冒頭で紹介したフレイザーは、同書のなかで、「くま」のぬいぐるみについて、次のように述べている。「なぜぬいぐるみの熊は子どもたちをこれほど惹き付けるのでしょうか？このとりたててかわったところもない人形がなぜ驚くほど子どもたちの愛情をかち得て、しかもそれが永続するのはなぜか、そしてさまざまなおもちゃが一時的に熱狂的な流行を呼んでは消え去っていく間、なぜ生き永らえてきたのか—まちがいなくそれはおもちゃの歴史に関するもっとも興味深い心理的な問題です。」⁽⁴⁶⁾

ここに示されるように、「くま」のぬいぐるみが我々の心を捉えてやまない理由を探するのは、容易なことではない。しかし筆者は、次の3点があるのではないだろうかと考える。すなわち第一に、移行対象として機能するほどに柔らかな感触があり、抱く人間の情緒安定に機能しうること。第二に、ぬいぐるみながら人間のように自由に動く手足と頭、人間のように表情豊かな顔と抱く人の心を捉えて離さない目を持っていること。そして第三に、先に挙げた二点とも、ほんらい熊のもっている生態的特徴を極端に歪曲して作り出されたものではなく、動物としての熊が有している特徴を本質的には模しているものであり不自然さが少ないこと。これら3点が相俟って、くまのぬいぐるみ、すなわちテディベアの絶大な人気が生産されているように考えるのである。

結 終わりに変えて

今回、キャラクターとしての「くま」の魅力の要因を、二つの方向から分析した。多くの分野の先行研究成果を用いて探ってきたのであるが、その魅力の解明は予想以上に難しく、この課題追究の道筋は複雑である。それでも、この不思議な魅力を持つ、キャラクター化された「くま」の魅力

人格化される熊(1)

の考察は、興味深く、乳幼児教育や児童文化の一角に位置する「モノ」の考察として重要なものであろうかと思う。今後も可能な範囲で、この研究ノートを伸展させて行きたいと思う。

なお、この研究ノートにおいては、歴史に見る野生の熊と人間との関わりや、児童文学や絵本に描かれる「くま」の事例検討、保育現場や家庭における「くま」のキャラクターの存在の確認や、子どもが「くま」のキャラクターとどのような関係を結んでいるかなどの実際の姿に、触れることができなかった。本稿に続く(2)、(3)として順次シリーズ研究を行っていく。また、この研究ノートにおいては、課題の特質上、本来ならば写真や図などを多く掲載したほうが分かりやすいのであるが、著作権その他の権利問題が生じる可能性のあるものが多く、今回は殆どの掲載を控えることとした。ご関心のある向きには、お手数をかけるが、筆者までお尋ねいただくか、参考文献などを直接御覧いただきたい。

この研究ノートにおける課題に取り組むために、本学の児童学科に所属される、児童文化論の森下みさ子先生、保育学の長山篤子先生に、格別なるご助言とご指南を頂戴した。また、一部の資料の提供において、児童教育学演習2期生の松崎麻子、4期生の河田美弥、早川実沙の協力を得た。ここに記して感謝する。

引用文献一覧

- (1) シートン著 今泉吉晴訳『シートン動物誌④ グリズリーの知性』紀伊國屋書店 1998 p.85
- (2) 同上 p.119
- (3) 同上 p.119
- (4) 同上 p.119
- (5) 同上 pp.337~338
- (6) 同上 p.338
- (7) 同上 p.339
- (8) 同上 p.357
- (9) 同上 p.363
- (10) 同上 p.428
- (11) 椋鳩十『月の輪グマ』椋鳩十全集1 ポプラ社 1969 pp.62~63
- (12) 同上 p.67
- (13) 同上 p.69
- (14) レスリー R. F. 著 中村能三訳『はるかなる仔熊の森』草思社 1976 (原著記載無し) p.19
- (15) フレイザー、アントニア著 和久洋三監訳『おもちゃの文化史』玉川大学出版部 1980 p.8
- (16) 同上 p.135
- (17) ニューソン, J + E 著 三輪弘道他訳『おもちゃと遊具の心理学』黎明書房 1981 p.132
- (18) 同上 p.133
- (19) 前掲 (15) p.56
- (20) 同上 p.82
- (21) 同上 p.118
- (22) コックリル, ポーリー著 古田和与他訳『テディベア図鑑』ネコ・パブリッシング 2002 pp.8~

- (23) テディベア生誕100年展オフィシャルガイドブック 同実行委員会発行 2002 p.20
(24) 赤田はつ子『いつもとなりにテディベア』文芸社 2001 p.79
(25) 同上 p.110
(26) 同上 p.110
(27) 前掲(23) p.13
(28) 前掲(24) p.79
(29) 前掲(22) 全体
(30) 前掲(24) p.80
(31) 井原成男他著『移行対象の臨床的展開—ぬいぐるみの発達心理学』岩崎学術出版社 2006 pp.13~14
(32) 同上 pp.13~14
(33) 同上 p.14
(34) 同上 p.116
(35) 同上 p.117
(36) 同上 p.117
(37) 同上 p.138
(38) 同上 p.111
(39) 同上 p.133
(40) 同上 p.133
(41) 同上 p.133
(42) 同上 p.133
(43) 前掲(17) pp.134~135
(44) 前掲(24) p.122
(45) 同上 p.128
(46) 前掲(15) pp.135~136

参考文献一覧

<研究書>

- 赤田はつ子『いつもとなりにテディベア』文芸社 2001
井原成男他編著『移行対象の臨床的展開—ぬいぐるみの発達心理学—』岩崎学術出版社 2006
Cockrill, P., *The Teddy Bear Encyclopedia*, Dorling Kindersley London, 1993
(コックリル, ポーリン著 古田和与他訳『テディベア図鑑』ネコ・パブリッシング 2002)
Winnicott, D. W. *Playing and Reality*, Tavistock Publications Ltd, London, 1971
(ウイニコット著 橋本雅雄訳『遊ぶことと現実』岩崎学術出版社 1979)
Abram, J., *The Language of Winnicott: A Dictionary of Winnicott's Use of Words*, H. Karnac Ltd., 1996
(エイブラハム, ジャン著 館直彦監訳『ウイニコット用語辞典』誠信書房 2006)
Seton, E. T. *LIVES OF GAME ANIMALS*, 1925-1928
(シートン著 今泉吉晴訳『シートン動物誌④ グリズリーの知性』紀伊國屋書店 1998)
Sibley, B., *THREE CHEERS FOR POOH*, 2001
(シブリー, ブライアン著 早川敦子訳『クマのプーさんの世界』岩崎書店 2003)
Newson, J. and E., *Toys and Playthings* Allen and Unwin 1979
(ニューソン, J + E 著 三輪弘道他訳『おもちゃと遊具の心理学』黎明書房 1981)
Frazer, A. *A History of Toys* (発行所, 年 記載なし)
(フレイザー, アントニア著 和久洋三監訳『おもちゃの文化史』玉川大学出版部 1980)
本田和子・皆川美恵子・森下みさ子『わたしたちの「江戸」—<女・子ども>の誕生—』新曜社 1985
若月伸一・佐藤豊彦『テディベアのすべてが知りたい』講談社カルチャーブックス128 講談社 1998

人格化される熊(1)

<文学, 絵本, 写真集>

合田経郎『ほくはくま』小学館 2007 (NHKみんなのうた「ほくはくま」宇多田ヒカル作詞・作曲)

Seton, E. T., *Monarch, The Bear of Tallac* (発行者, 年 記載なし)

(シートン作・絵 今泉吉晴訳『グリズリー・ジャック』シートン動物記9 2006)

星野道夫文・写真『クマよ』たくさんのふしぎ傑作集 福音館書店 1998

星野道夫著・写真『グリズリー アラスカの王者』平凡社ライブラリー 450 平凡社 2002

Milne, A. A., Shepard, E. H., *WINNIE-THE-POOH*, Egmont Children's Books 1926

(ミルン・A.A. 著 シェパード絵 石井桃子訳『クマのプーさん』岩波少年文庫008 岩波書店 1956)

椋鳩十『月の輪グマ』椋鳩十全集1 ポプラ社 1969

レスリー R.F. 著 中村能三訳『はるかなる仔熊の森』草思社 1976 (原著の記載無し)

<HP, DVD, カタログなど>

シュタイフギャラリーパンフレット, 公式HP

SHE TURNED HER DREAM INTO A DREAM FOR CHILDREN - THE TEDDY BEAR

(『テディ・ベア誕生物語～全ての困難を乗り越えて～』シュタイフ社製DVD ポリドール映像販売会社 2006)

『四季 知床半島 ヒグマ親子の物語』DVD NHK エンタープライズ 2006

(財)日本玩具文化財団 公式HP

『テディベア生誕100年展オフィシャルガイドブック』同実行委員会発行 2002

「ほくはくま」宇多田ヒカル CD及びDVD 東芝EMI 2007

山中湖テディベアワールドミュージアム展示